



Title	弥生時代の葬送儀礼と土器
Author(s)	大庭, 重信
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1992, 26, p. 89-113
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48031
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

弥生時代の葬送儀礼と土器

大庭重信

一 はじめに

葬送儀礼は、死者をとりまく集団によってとりおこなわれる通過儀礼としての側面を持つ。その意味で葬送儀礼の実態を復元することは、当時の死に関わる習俗を明らかにするとともに、死者の生前有した社会関係を解明する上でも重要となってくる。

さて、葬送の場で行われた行為自体の痕跡が考古資料として残される場合は必ずしも多いとはいえない。そのなかで、弥生時代の方形周溝墓から普遍的に出土する土器は当時の葬送儀礼を復元する上で数少ない有効な資料であるといえよう。

これらの土器は、しばしば器種が壺である場合が多く、かつ故意に穿孔や破砕がなされるなど日常生活の場ではみられない特異な状態で出土する。そのため、その土器の性格に関しても方形周溝墓が検出された当初から強い関心が寄せられてきた。そして、記紀や民族例に壺を神の憑り代とする事例が多いことから、これらの土器は「稲

魂」を入れる器として墳墓に供献されたという解釈が主としてなされてきた。⁽²⁾

これに対し、田代克己は、モノを入れるのにふさわしくない甕が多く含まれること、土器に穿孔や欠損が認められ本来の用をなさない状態で出土することを根拠に、これらが葬送儀礼の際に飲食物を入れたり、盛ったり、煮炊きするために使用され、葬儀が終了した後に汚れたものとして廃棄された土器であるとした。⁽³⁾ また、辻本宗久や田中清美は、⁽⁵⁾ 田代の視点をさらに発展させ、主に土器の出土状況から葬送儀礼の復元を試みた。

これらの研究は一定の成果をあげている一方、出土土器自体の様々な特徴を分析する試みは近年の資料の増加の割には未だ十分とはいえない。そこで本稿では、弥生時代の葬送儀礼の実態を明らかにするための基礎作業として、まず墳墓から出土する土器と集落から出土する土器の比較を行うことにより墳墓出土土器の特徴を明らかにし、葬送儀礼での使用時における役割を推定する。そしてこの分析をもとに、弥生時代の畿内における葬送儀礼の特質およびその時期的変遷を明らかにする。また、畿内での古墳の出現過程についても葬送儀礼の面から考察する一視点を提示したい。考察の対象としては、最近の発掘調査の増加によって資料の蓄積が進んでいる河内地域を中心に畿内での事例をとりあげることとする。

二 弥生時代中期の葬送儀礼と土器

畿内において弥生時代中期中葉・後葉（Ⅲ期・Ⅳ期）は方形周溝墓の造営がもっとも盛んに行われた時期であり、資料も豊富である。そこでまず中期中葉・後葉の資料について分析を行う。なお、以下の叙述では、特に断らない限り「中期」と表現するのは中期の中葉・後葉のことをさす。

(1) 土器の器種構成

本稿では墳墓から出土する土器のなかで、ある程度復元可能な、意識的に墳墓に持ち込まれたと考えられるもののみをとりあつかい、混入品の可能性がある小破片は分析の対象から除外する⁽⁶⁾。

墳墓から出土する土器は、集落から出土する土器と変わらないものが用いられており、それらは葬送儀礼での用途に応じて日常生活で使用されるものの中から選別されたと考えられる。そこで、以下において実際にどのような土器が選別されたのかをみていこう。

中期の墳墓から出土する土器の器種構成をみると、例えば東大阪市瓜生堂遺跡方形周溝墓群の場合、壺五〇%、甕一三%、高坏六%、鉢二四%となり、壺が過半数を占める。同遺跡で墳墓以外の溝内から出土した土器群がある程度集落での比率を反映すると考えると、壺二四%、甕四八%、高坏一六%、鉢九%、その他三%となり⁽⁷⁾、集落と比較して墳墓では壺の比率が極端に高いことがわかる。ただし、壺だけではなく他の器種も一定の割合で含まれる事実も見がせない。同様の傾向は河内地域の他の遺跡でも認められる。

では、壺は墳墓と集落においてどのようなありかたの違いを示す

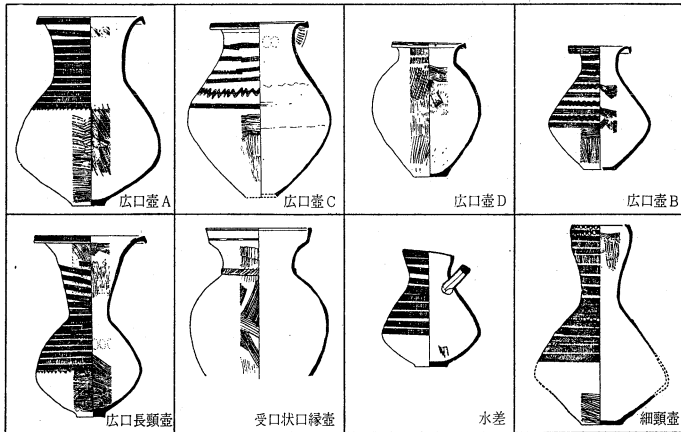


図1 壺の器種分類

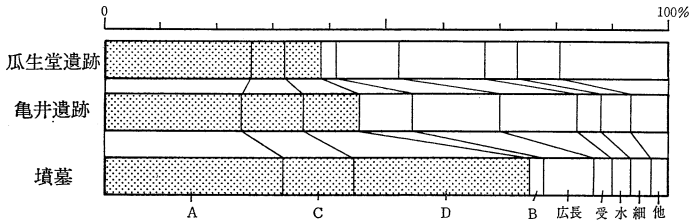


図2 集落と墳墓における壺の器種構成

のであろうか。まず、壺を形態や文様の特徴から広口壺A、広口壺B、広口壺C、広口壺D、広口長頸壺、受口状口縁壺、水差、細頸壺の九器種に細分する(図1)。この壺の細分器種構成を当該期の墳墓資料と河内地域の代表的な拠点集落である八尾市亀井遺跡⁽¹⁰⁾および瓜生堂遺跡⁽¹¹⁾の集落資料とでとりあげ、それぞれを比較すると図2のようなことになる。ここで注意しなければならないことは中期の間にもそれぞれの器種に消長がみられ、時期差をもつという点である。しかし、方形周溝墓はある程度継続の時間幅を持ち、かつ集落遺跡でそれぞれの器種の変遷を細かい時期毎に示しうる資料は現段階では十分ではない。そのため、ここでは中期の資料を一括してとりあげ、不十分な点は補足を行うこととし、議論を進めていく。

図2によると、墳墓では広口壺A、C、Dが集落より高い頻度で出土することがわかり、三器種で壺全体の七五%を占める。特に広口壺Dは墳墓で出土する比率が極めて高い器種である。広口壺Dは主に中期後葉に盛行するものであり、墳墓での出土の多さは資料の時期的かたよりを反映している可能性があるが、その点を考慮しても葬送儀礼に使用される頻度は高い。逆に広口壺B、受口状口縁壺は集落に比べて墳墓で出土する頻度が低く、葬送儀礼には余り用いられない器種であったといえる。

こうした状況をみると、多様な器種が用いられながらも、壺のなかで特に広口壺A、C、Dは葬送儀礼での用途に適した器種として選別されたということがいえよう。

(2) 壺にみる使用痕跡

それではなぜ広口壺A、C、Dがとくに葬送儀礼の場で多用されたのであろうか。これらの土器の用途を考えることは葬送儀礼の実態を解明する上での一助となろう。ここで注目したいことは、墳墓から出土する広口壺A、C、Dが貯蔵形態であるにもかかわらず外面に煤の付着が顕著であり、煮沸のために使用されているという事実である。筆者の実見した資料をもとにその比率を出せば、墳墓から出土する広口壺Aに七六%（五四個体中）、広口壺Cに七七%（三〇個体中）、広口壺Dには七七%（六三個体中）と三器種とも七五%を越える高率で煤が付着する。一方、日常生活で使用されたと考えられる集落出土資料では、広口壺Aに四一%（一七個体中）、広口壺Cに四六%（二〇個体中）の割合で煤が付着し、墳墓出土土器に比べてその比率が極めて低い。ただし、広口壺Dは煮沸専用の壺と考えられる土すのものにも墳墓出土の例と同様に煤の付着が顕著に認められる。これまで広口壺Dは煮沸専用の壺と考えられてきたものであるが、井戸祭祀に用いられる場合や胴部を穿孔された状態で集落から出土する場合が多く、煮沸行為と祭祀行為との間に密接な関係がうかがえる。参考までに墓から出土する他器種の壺への煤付着率をみると、受口状口縁壺は二八%（七個体中）、広口長頸壺は二五%（二〇個体中）、広口壺Bは一七%（六個体中）、水差は二十%（一五個体中）、細頸壺は〇%（一一個体中）であり、広口壺A、C、Dに比べて非常に低い。とくに、葬送儀礼には余り用いられないとした受口状口縁壺や広口壺Bには煤の付着する比率が低いことは注目される。以上のことから、葬送儀礼では火にかけるという用途に適した器種が選ばれて用いられた可能性があろう。さらに、集落と比較して煤の付着する比率が高いということは、単に日常生活で火にかけられたものがそのまま墳墓用に転用されたのではなく、これらが葬儀のなかでの煮沸行為において使用されたものであることを示している。

次に、墳墓にみられるこのような特異性をより明確にするために、付着する煤の特徴からみた壺の使われかたについて詳しく検討していきたい。資料の中には後世の風化や剥離によって当時の現状をとどめていない場合があると考えられるが、ここではおおまかな傾向または目安として煤の具体的特徴についてふれていくことにする。

広口壺A、C、Dをとりあげて煤の付着状況を観察すると、付着する部位によって外面のa（全面）、b（胴部中央）、c（胴部下半）に付着するものの三通りに大別することができる（図3）。煤の付着部位は炉の構造、火力、加熱時間、煮沸に使用された頻度、煮沸時の気象条件あるいは土器の器形などによって左右されると考えられるが、ここでは加熱時間と煮沸に使用された頻度を考えるために、煤の状態を濃さによって以下の3等級に分ける。肉眼観察による主観的判断に頼ったが、ある程度の目安となる。

- 1級 濃い黒褐色であり煤が厚みをもってこびりつくもの
- 2級 濃さは1級と同程度の黒褐色であるが、こびりつきは認められないもの
- 3級 濃さは1級や2級より薄く茶褐色であり、こびりつきは認められないもの

これらの基準をもとに煤の付着部位と濃さの関係を示したものが図4である。墳墓出土の例について図4から認めうることは、まずb（胴部中央）とc（胴部下半）に付着する場合がほとんどであり、a（全面）の場合是非常

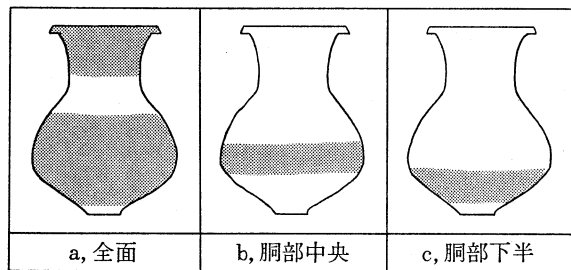


図3 煤の付着部位（広口壺Aの場合）

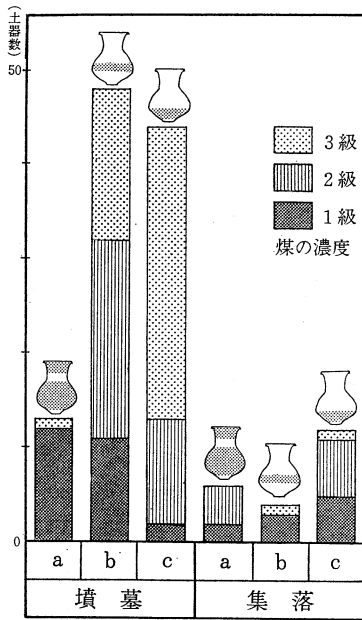


図4 壺にみる煤の付着部位と濃度

が最も多く、不安定な弱い火力による煮沸を考えることができる。

以上の分析結果から、墳墓出土の資料には何度も強火にかけられたものは少なく、一回、あるいは数回の弱火にかけられた痕跡を残すものがほとんどを占めるということがいえよう。ちなみに集落出土の資料をみると、煤の濃いものが多く、また付着する部位と濃さとの明瞭な対応関係は認め

に少ないということである。

また、付着する部位によって煤の濃さが異なっており、両者はある程度対応関係にあることも認められる。つまり、付着部位が a から c になるにしたがい煤の濃度が 1 級から 3 級へと薄くなっていく。それぞれの付着部位について説明を加えると、a (全面) は頸部の内湾する部分と底部周辺をのぞいてほぼ全面に付着するものであり、煤の濃さは濃くこびりつきをもつ 1 級の場合がほとんどである。b (胴部中央) は胴部最大径周辺に帯状に付着するものである。下半部はほとんど変色しないもの、わずかに褐色化するもの、器壁が赤色化し荒れるものがみられるが、総じて器壁の変色は少なく、長時間の加熱によるものとは考え難い。煤の濃さは 1 級と 2 級と 3 級がほぼ同程度認められ、こびりつきを持たないものが主となる。c (胴部下半) は底部周辺を除いた胴部下半に付着するものであり、部分的に付着するもの、斑点状に付着するもの、帯状にめぐるものと様でない。煤の濃さは 3 級の場合

られない。墳墓資料と集落資料とのこのような違いは、日常生活で使用した際に煤の付着した壺がそのまま墓に転用されたのではないとした前述の推定を裏付ける。さらに、墳墓から出土する煤の付着した壺の内面には、甕の内面にしばしば付着するこげつき状の物質がほとんど認められない。このことから、これらの壺は、液体の加熱に使用されたことが推測される。やや繁雑となったが、以上の観察の結果から、墳墓出土の煤の付着した壺は集落内で使用されたものが再利用されたのではなく、葬送儀礼という非日常的な行為のなかで主として液体の加熱のために火にかけられたということができよう。

さて、ここで注目すべきは、穿孔や打ち欠きなどがなされた壺にも同様に煤が付着していることである。例えば、広口壺A、C、Dのなかで焼成後に穿孔の施された個体には七一%という高率で煤が付着している。また巨摩廃寺遺跡方形周溝墓群から出土した広口壺Dの多くが口縁部を二次的に打ち欠かれているということが報告者によって指摘されているが、これらの壺の外面には煤が付着していたという。⁽¹³⁾このように、穿孔、打ち欠きの有無に関わらず煤の付着が顕著に認められることは重要である。これらの行為は実際に土器を火にかけ、葬送儀礼のために使用した後になされた実用否定の行為と考えることができる。したがって、あらかじめ土器に穿孔を施すことによって仮器として使用されたという考えは認めがたい。おそらく、このような実用を否定する行為は、田代が指摘するよう祭に祭祀で使用した後に「けがれ」をはらうといった意味でとりおこなわれたのであろう。

(3) 土器の出土状況

次に墳墓での土器の扱われ方や出土位置から土器の用途について考えていきたい。ここでは埋葬施設との位置関係を重視して、土器の置かれた位置を墓壇内、墓壇上、周溝内に分け、それぞれの具体例をみていく。

墓境内

東大阪市鬼虎川遺跡一二次調査では土墳墓から墓墳底に接した状態で完形の直口壺が一点出土しており、壺の外面上には煤が付着している。⁽¹⁴⁾ 大阪市城山遺跡一七号方形周溝墓の四号主体部では木棺の直下から完形の広口壺Dが一点出土している。⁽¹⁵⁾ 中期前葉の資料であるが、八尾市恩智遺跡木棺墓でも木棺の直下から壺五点、甕一点、鉢一点と木製鋤一点が出土している。⁽¹⁶⁾ 壺二点の胴部下半、鉢の底部にそれぞれ焼成後の穿孔がほどこされており、穿孔土器を含む壺三点の外面上には煤が付着している。

墓境内から出土した土器は壺に煤の付着したものが多く点や、棺内ではなく棺の設置以前あるいは被葬者を埋葬する以前に入れられている点などから副葬品としてはとらえ難い。被葬者の埋葬に先だつ祭祀において使用されたものを墓境内に入れたと考えるべきであろう。恩智遺跡木棺墓の墓境内から出土した木製鋤も二つに分割された状態で出土していることから、単なる供献品や副葬品ではなく、土器とともに祭祀具として使用されたかあるいは墓堀削などの道具として使用された後、意図的に破壊され墓境内に入れられたものと考えられよう。

墓墳上 出土状況から類推して、被葬者の埋葬が終了した後に墓墳の上に置かれたと考えられるものを取りあげる。

瓜生堂遺跡二号方形周溝墓では三号木棺の埋土中から高坏が、五号木棺付近の盛土中から小型の碗形土器が、また六号木棺付近のマウンド表面からは台付きの無頸壺が出土しており、⁽¹⁷⁾ それぞれの木棺に伴っていたものと考えられる。周溝内からは煤の付着した壺などが多く出土するのに対し、墓墳上では煤の付着しない高坏や碗、無頸壺などの供膳用の土器に限られる点は注目される。大阪市加美遺跡Y一号墓でも墓墳上からは高坏など供膳具を中心とした土器が出土しており、⁽¹⁷⁾ 同様の状況がうかがえる。

このように、墓墳上に置かれたと考えられる土器は供膳用の器種が中心であり、被葬者を埋葬し終わった後の被葬者に対する供献行為に使用されたと考えられよう。

周溝内 ほとんどの方形周溝墓は周溝内から土器が出土する。完形に近い土器は溝底に接するか、あるいは溝底より若干高いレベルで出土する場合が多い。本来は溝内に置かれていたものと墳丘肩に置かれていたものがあつたと考えられるが、器種の組成や土器の出土状態で区別することが困難であるため、両者を一括して周溝内として扱う。

城山遺跡一九号方形周溝墓では北東周溝および南西周溝の陸橋部周辺から土器が二群に分かれて出土した(図5)。あたかも二基の中心埋葬施設に伴うようにそれぞれが一括して置かれた状態を呈しており、器種構成は北東周溝が壺四点、甕二点、高坏一点、蓋一点、南西周溝が壺一点、甕一点、高坏一点である。他に盛土内から壺二点、鉢一点が出土している。このうち壺は盛土内出土の広口長頸壺をのぞいて広口壺Aや広口壺Dで占められており、外面に煤の付着したものが

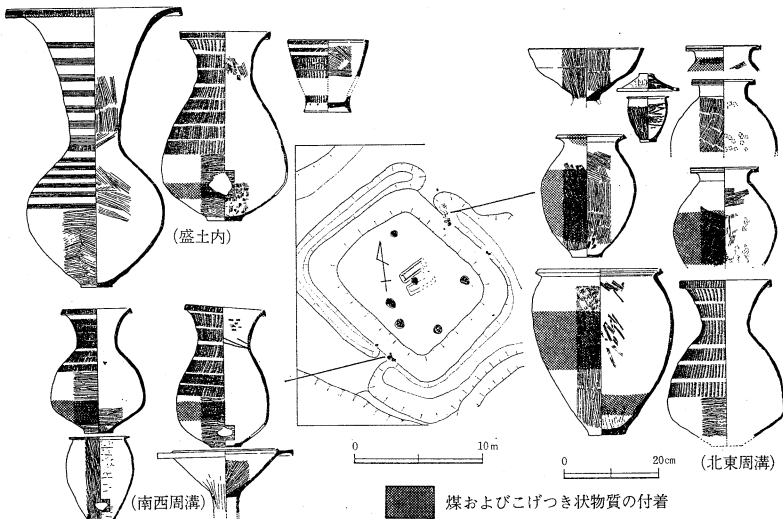


図5 城山遺跡19号方形周溝墓(註15文献による)

目立つ。壺や甕の胴部下半には焼成後の穿孔が施されるものも存在する。

城山例のように、煤の付着した壺を中心とした甕や高坏、鉢などの複数器種の土器群がまとまって出土する例は多い。これらの土器群は祭祀に使用された後に穿孔されたり破碎され、周溝内に廃棄されたのであろう。

一方、煤の付着しない壺が特異な状況で出土する場合もある。瓜生堂遺跡九号方形周溝墓では墳丘裾のコーナーに穴を掘って広口長頸壺二点を立てた状態ですえおいていた。⁽⁷⁾ 亀井遺跡ST一七〇一方形周溝墓では広口長頸壺二点、頸部の欠損した壺一点、甕二点が墳丘裾のコーナーに穴を掘ってすえおいた状態で並べられていた。⁽¹⁰⁾ そのうちの大型の甕の内部からはイノシシの下顎骨が出土しており、内容物を入れて墳墓に供献したと考えられる。このような例は、土器を使って飲食を行うことよりも、あきらかに土器をすえおくことに意味があったのであろう。類例は現在のところ中期中葉までに限定され、また煤の付着しない広口長頸壺が多く使用されている点は注目すべきである。

このように、煤付着の有無や器種構成の特徴が、出土位置や出土状況の違いと関連していることは重要である。方形周溝墓から出土する土器にも、葬送儀礼の様々な局面のなかで異なる用途をもって使用されたものが混在しているのである。

(4) 弥生時代中期の葬送儀礼

弥生時代中期の葬送儀礼に使用された土器に関するこれまでの考察で判明したことを、以下のように整理することができる。

一、葬送儀礼に使用された土器は壺が最も多いが、壺のなかでも特に多用される器種には煤が多く付着すること

から、葬送儀礼の場で非日常的な煮沸を行うために選別されたと考えられる。

二、また、煤の付着した壺は穿孔、打ち欠き、破碎あるいは完形などさまざまな状態で、甕や高坏や鉢など他器種と共に周溝内から出土する。他の土器群と共に葬送儀礼の中で使用された後、まとめて廃棄されたと考えられよう。少数ではあるが、煮沸に使用した壺などを埋葬以前に墓壇内に入れる例も認められる。

三、そのような煮沸を伴わない行為として、少数ではあるが墓壇上での供膳具の供献、墳丘裾での壺のすえおきなども認められる。

さて、一や二に示される儀礼行為の実態はどのようなものであろうか。墳墓出土の壺や甕の外面に付着する煤は、祭祀に使用するための飲食物を火にかけ、調理を行ったことを示唆する。また、周溝内から出土する土器が器種構成や煤付着の有無の点で、墓壇上ではなく墓壇内出土土器と類似する点は注目すべきであろう。煤の付着する墓壇内から出土する土器が被葬者を埋葬する以前に使用された点を重視すると、同じく煤の付着する周溝内出土の土器群も埋葬に先だつ祭祀において使用されたと推定することができる。

こうした状況を考える上で、『魏志倭人伝』において倭人の葬送習俗にかんして触れた部分が示唆を与える。『魏志倭人伝』では、埋葬に至るまでの「十余日」、「喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す」と記述している。⁽¹⁸⁾ 想像をたくましくすると、墓壇内や周溝内から出土する煤の付着した壺を中心とした土器群は、このような「歌舞飲酒」儀礼に用いられたのではないか。

先にみた城山遺跡一九号方形周溝墓で、土器のまとまりが各木棺に対応すると考えたように、土器は死者を埋葬する度にとりおこなわれた祭祀に使用されたのであろう。このように個々の埋葬において行われる祭祀は、被葬者

個人を対象としたものであったとしても、方形周溝墓に複数埋葬が実施されることから考えれば、それは家族単位でとりおこなわれる世帯共同体的な祭祀であったと推定しうる。この祭祀は死者に対する哀悼の儀礼行為であるとともに、その行為を通じて参列者を結びつける重要な場となったにちがいない。その意味で飲食物は死者に捧げると共に参列者の間で共食することに意味があったのであろう。

三 葬送儀礼の時期的変遷

(1) 各時期の様相

これまで河内地域の中期中葉・後葉の資料に関して分析してきたが、前後の時期の資料についても同様の観点から分析を行い、時期的変遷を検討していきたい。まず各時期の具体例をみていこう。

中期前葉の方形周溝墓は単数埋葬が一般的であり、出土する土器の数も少ない。例えば城山遺跡一二号方形周溝墓では周溝内から煤の付着しない広口長頸壺が二点出土している。⁽¹⁵⁾ 他の遺跡でも周溝内から土器が出土する事例は壺である場合が多い。なお、墓壇上に置かれたと考えられる例は鬼虎川遺跡一二次調査で検出された五号方形周溝墓に認められ、第一主体付近から高坏が一点出土している。⁽¹⁴⁾ また、恩智遺跡木棺墓では前述したように煤の付着した壺を中心に甕、鉢が墓壇内から一括で出土している。

さて、後期になると、中期まで盛んに造営されていた方形周溝墓もその数を激減させる。墓制の具体相を指摘することは資料的な制約から現段階では困難であるが、単葬もしくは少数埋葬となる傾向がある。断片的な資料によると、周溝内から出土する土器は中期と比べて壺が減少するのに対し、甕および高坏などが目立つようになる。例

をあげると四条畷市雁屋遺跡一号方形周溝墓では、周溝内から甕三点、手焙り形土器二点が出土している。そのうち甕一点の胴部には焼成後の穿孔が施されている。⁽¹⁹⁾

終末期になると、河内平野において方形周溝墓が再び急増する。共同墓地を構成するという点では中期の方形周溝墓と変わらないが、単葬もしくは少数埋葬が支配的となっており、被葬者は上位階層の人間に限定されていたようである。八尾市東郷遺跡三号方形周溝墓では周溝内から甕六点、二重口縁壺一点を含む壺二点、器台一点が出土しており、⁽²⁰⁾甕が目立つ。古墳時代初頭の資料であるが、八尾市久宝寺南遺跡三号墓はマウンドの一边に短い突出部を持つ特異な墳形であり、周溝内から完形もしくは完形に近い土器群が多量に出土した。現在報告されている資料では溝内最下層から甕三四点、壺六点、小型丸底壺一三点、高坏四点、鉢七点、器台四点が出土しており、⁽²¹⁾甕が多い。なお、ほとんどの甕は外面に煤が付着しており、胴部に焼成後に穿孔を施したものも存在する。また、小型丸底壺にも外面に煤の付着したものが多く、火にかけるといふ特別な用途に使用されたことが推測される。壺の出土数は少ないが、焼成前に底部を穿孔した二重口縁壺が鼓形器台とセットになって他の土器群に混じって出土したことは注目されよう。

久宝寺南例は、極めて多量の土器が出土する点で東郷例や他の方形周溝墓と比べて異なったあり方を示す。しかし、煤の付着した甕が多い点や焼成後に胴部を穿孔された土器を含む点などに共通点が見いだせることから、同様の祭祀形態であったと考えられる。両者は質的な差ではなく量的な差ととらえるべきであろう。

(2) 器種構成の変遷

以上のように、弥生時代を通じて方形周溝墓の周溝内から土器が出土しているが、時期によって器種構成に変化

が認められることは注目される。河内地域の資料を集成し、器種構成の変遷をグラフ化すれば図6のようになる。⁽²²⁾ 各時期の様相を概略すると、中期前葉では壺が器種構成の大半を占めており、他の器種はごくわずかである。中期中葉・後葉になると、壺に加えて甕や高杯、鉢が一定の比率で含まれるようになる。後期になると、いままでも全器種の過半数を占めていた壺はその比率を低下させ、逆に甕や高杯に占ってかわられるようになる。同様の傾向は終末期になるとさらに顕著になっていく。

このような器種構成の変遷は葬送儀礼で用いられた土器のセット関係が変化したことを示すが、その変化はいかなる要因によっておこったのであろうか。このことを考えるために、畿内の代表的な集落から出土する土器の器種構成を時期別に示したものが図7である。⁽²³⁾ 集落での器種構成の変遷をみると、甕が全時期を通じてほぼ全器種の過半数、もしくはそれ

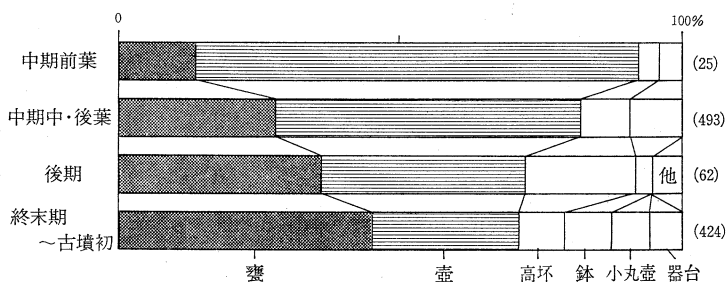


図6 墳墓における器種構成

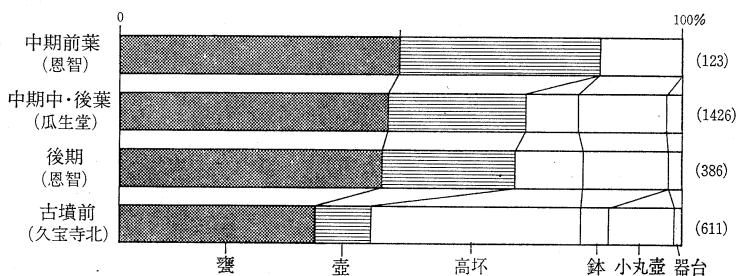


図7 集落における器種構成

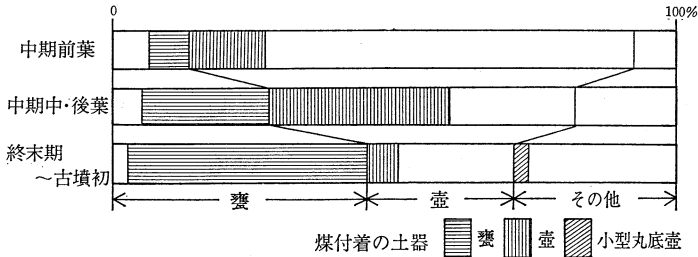


図8 墳墓における土器への煤付着の割合

に近い比率を占めているのに対し、壺は時期を追うごとにその比率が低くなり、逆に高坏や鉢など供膳形態の土器はその比率が高くなる。

墳墓での器種構成の変遷を集落と比較すると、壺および高坏などの供膳形態の変化は集落の変化と軌を一にしており、集落での生活様式の変化が葬送儀礼で用いられる土器にも影響を与えたことがうかがえる。しかし、時期を追うごとに甕の比率が高くなる現象は集落での変化とは一致せず、葬送儀礼自体の変化にその要因を求めるべきであろう。

ここで、墳墓における甕の比率が高くなる現象を考える上で、中期の葬送儀礼では甕だけではなく、壺をも火にかける道具として使用していたことに注目したい。墳墓出土土器の器種構成のグラフに煤付着の有無という要素を加えたものが図8である。⁽²⁴⁾なお、後期の資料は数量的に不足しているので図からは除外しておく。

図8によれば、中期前葉では火にかけられた土器は非常に少なく、煤の付着しない壺がほとんどを占める。ところが、中期中葉・後葉になると甕の比率が高くなると共に、壺への煤の付着が顕著となる。その結果、火にかけられた土器が急増し、全体のほぼ半数を占めるようになる。このような背景には祭祀形態の変化があったことが予想されよう。中期の葬送儀礼において共食行為が行われていたと考えうることは前述したが、中期前葉では火にかけられた土器は少なく、かつ壺が単独で出土する例が多

いことから、それらは共食を伴わない供献的性格の強いものであった可能性がある。このように考えると、中期中葉に散見された墳丘裾部に穴を掘って広口長頸壺を中心とした土器をすえおく例は、中期前葉の葬送儀礼の残存形態ととらえることもできよう。

また終末期になると、中期まで主流を占めていた壺の比率は低くなり、かつ煤の付着も稀になる。一方、甕の比率は高くなり、火にかけられた土器が器種全体の半数近くを占める点では中期と共通する。このような終末期の様相は、後期の段階からすでに認められる。壺がその比率を低下させるとともに火にかけられた例が少なくなる背景には、土器の無文化や粗雑化、あるいは集落での比率の低下に示されるように、中期まで壺に与えられていた社会的役割が後期以降変化したことが推測される。⁽²⁾とはいえ、それに置き換わるように煤の付着する甕の比率が高くなる現象は、日常生活における器種構成の再編成の影響を受けながらも、共食行為を行うという儀礼の特徴が後期以降、終末期に至るまで依然として存続していたと考えることができよう。

さて、中期の方形周溝墓が多数埋葬を基本とし、家族墓の様相が強かったのに対し、後期や終末期になると単数埋葬が主となり、被葬者は特定個人に限定されるようになる。このことは、葬送儀礼においても、中期の世帯共同的な祭祀がなんらかの変質を伴っていたことを推測させる。しかし、そうした状況のなかでも共食行為を存続させている点は、後期や終末期の方形周溝墓が中期同様、共同墓地を構成していたことと考えあわせて、古い伝統を一部に残していたことがうかがえよう。

そのなかで、終末期以降になると、先述した久宝寺南三号墓のように共同墓地の中に存在しながら墳形によって他の墳墓との間に階層的優位性を表現するものが出現する。これらの墳墓が葬送儀礼においても同時期の他の方形

周溝墓と比べて多量の土器を使用している事実は、階層的優位性をあらわす別の側面として評価できよう。

四 周辺地域の様相

畿内との比較検討を行う意味で、近隣地域の様相についてもふれておこう。

方形周溝墓として一括される墓制も、周溝形態の違いや墳丘上に葬られる被葬者の数の違いなどの多様性から、各地域内での独自の展開がうかがえる。土器を用いた葬送儀礼に関しても、地域毎に異なった形態であった可能性は十分に考えられ、先述した時期差だけではなく地域差が予想される。

摂津、和泉、大和、山城地域などの畿内諸地域では、これまで述べてきた河内地域とほぼ同じ変遷をたどる。しかし、高槻市安満遺跡や茨木市東奈良遺跡など摂津地域の中期前葉の方形周溝墓では周溝内から壺と甕がセットで出土し、当時期の河内地域やその他の地域と比較して甕の割合が極めて高い。⁽²⁶⁾ 壺には煤が付着しないが、甕の外表面には煤の付着が著しく、現象面だけをみれば煮沸行為を伴う共食儀礼がいち早く摂津地域で普遍的に行われていた可能性もあろう。

畿内の近隣地域に目を転じてみよう。滋賀県服部遺跡は総数三六〇基を越える方形周溝墓が検出された中期の大遺跡であるが、周溝内から出土した土器の器種構成は中期を通じて壺(七五%)⁽²⁷⁾が圧倒的に多い。ところが、報告書で示された編年観による第Ⅳ様式段階(中期末)になると、それまでが一三%であった甕の比率が二三%へと急増する。また筆者の肉眼観察によると、壺への煤の付着率もそれまでが八%であったのに対し三〇%と急に高くなる。結果的にこの時期になって火にかけられた痕跡を残す土器が急増したことになり、畿内と類似した祭祀形態の

変化が畿内より若干遅れて認められる。

さらに東の地域では、愛知県朝日遺跡の資料が手かりになる。当遺跡は前期から後期にかけて継続する尾張地域の大拠点集落であり、これまで総数二百基以上の方形周溝墓が検出されている。周溝内から出土する土器の器種構成は中期（朝日式期・貝田町式期・高蔵式期）を通じて壺（八二%）が圧倒的に多く、壺への煤の付着は三%と中期を通じて低い。⁽²⁸⁾煮沸の用途をもたない壺の祭祀が行われていたとすることができよう。甕や壺を火にかけないという特徴は、後期以降も継続して認められるが、後期（山中式期）の朝日遺跡の資料では高坏の比率が急増したり、また同じ尾張地域の土田遺跡では、終末期（欠山式期）になると壺が器種構成の大半を占め、そのなかでいわゆるパレススタイルの装飾壺が使用されるなど、新たな展開を見せる。⁽²⁹⁾以上のように、近江地域や尾張地域など畿内近隣地域では、特に中期以降、主として壺を使用し煮沸の痕跡が認められないという点で、畿内とは異なる祭祀形態であったことがうかがえる。参考までに関東地方の状況をみると、中期後葉の神奈川県勝土遺跡では、周溝内から出土する土器は壺が大半を占め、煤の付着する壺や甕はほとんどみられず、⁽³⁰⁾近江地域や尾張地域と似たありかたを示す。

一方、畿内と共通した様相を示す墳墓も散見される。先述した服部遺跡の例のほかに、滋賀県柿堂遺跡では五基の周溝墓から壺を中心とした後期の土器群が検出されており、ほとんどの壺の外表面には煤が付着している。⁽³¹⁾また、伊藤敏行は関東の方形周溝墓から出土する土器が、終末期になるとそれまでの壺主体のありかたと比べて甕、高坏や器台などの比率が高くなることを明らかにし、祭祀形態の変化を指摘している。⁽³²⁾ちょうどこの時期は、方形周溝墓の周溝形態において四隅に陸橋を残す東日本特有の形態が衰退し、四隅とも溝を連結させるものや一隅の中央の

みに陸橋を残すものへと変化する時期である。このような現象をあわせ考えると、畿内を含めた広い地域での葬送習俗の変換が終末期に起こっている可能性があるだろう。

五 葬送儀礼の新たな展開

中期以降、共食を伴う葬送儀礼を継続させてきた畿内地方において、終末期になると、火にかけられた痕跡を残す土器を含まない墳墓が散見されるようになる。具体例をあげてみよう。京都府城陽市芝ヶ原一・二号墳では墓壇上面に敷かれた礫群の中から、小片となった状態で加飾二重口縁壺三点と高坏一点が出土した。⁽³³⁾奈良県榛原町大王山九号墓では墓壇の中から上部より落ち込んだ状態で、加飾二重口縁壺が二点出土しており、その内一点は焼成前に底部穿孔が施されていた。⁽³⁴⁾また、京都府園部町黒田古墳からは墓壇に掘りこまれた盗掘抗のなかから加飾二重口縁壺三点が出土した。⁽³⁵⁾おそらく本来は墓壇上に置かれていたものであろう。

これらの墳墓に共通する特徴としては、第一に加飾二重口縁壺や高坏などが墓壇上から出土し、煮沸具を伴わない点、第二に棺内外に鉄製農工具類、武器類、鏡や玉類などの副葬品を伴う点、第三に共同墓地から離脱し丘陵上に墳墓を造営する点が挙げられる。

第一の点に関して、中期の段階にも墓壇上に供膳具を供献する例があることを指摘したが、上記の例は中期にまで系譜をたどることが出来るのであろうか。このことを考える上で注目すべきはこれらの墳墓が副葬品を伴う点である。副葬行為は、玉類や腕輪などの着用品をのぞいて畿内の中期段階には認められない習俗であり、後期および終末期になって上記の墳墓などに初めて採用されるものである。⁽³⁶⁾墓壇上に土器を置く行為を副葬行為や施朱などの

一連の埋葬儀礼の最終段階にとりおこなわれた祭祀行為ととらえると、埋葬の場での儀礼を重視するこのような祭祀形態は畿内の伝統からたどることは出来ない。このような形態は、畿内以外では岡山県山陽町四辻土壙墓群など中期後葉以降、吉備地域を中心に中国地方で多く認められる。したがって終末期にみられる以上の例は中期の墓壙上供献に系譜を求めるのではなく、中国地方との間に強い関連性を考えるべきであろう。芝ヶ原一二号墳や園部黒田古墳例にみるような主丘に取り付く突出部、あるいは芝ヶ原一二号墳にみるような墓壙上に円礫を敷く例が吉備地域の楯築遺跡などで後期後半に既に認められる要素であることは、このことを裏付けるものとなる。しかし、これらの祭祀形態が共同墓地を脱した首長墓に採用されている点は、中国地方からの単なる習俗の伝播としてではなく、墳丘上でとりおこなわれる葬送儀礼が、首長権継承儀礼などの政治的意味をもって、終末期になって出来上った各地の首長間のネットワークを通じて出現した可能性⁽³⁷⁾がある。以上の変化は、いままでの畿内における方形周溝墓の葬送儀礼の伝統をうちやぶり、古墳の成立へと移行する過程で起こった重要な転換と評価できよう。

六 おわりに

本稿では、弥生時代の墳墓から出土する土器資料に関して、器種構成や使用痕跡などの点から墳墓における用途を考えてきた。その結果、中期には壺を用いた特殊な煮沸行為が、後期以降には甕を用いた煮沸行為が多く認められ、土器を火にかける行為が葬送儀礼のなかで大きなウエイトを占めていたことが判明した。そして、土器を用いた葬送儀礼の性格を、参列者を結びつけるための共食行為と推定した。このような共食行為が、おそらく墳丘以外で行われたものであり、墳丘上での埋葬儀礼を重視する古墳祭祀に直接つながり得ない点は注目される。畿内

において、墳丘上での埋葬儀礼は終末期の一部の首長墓に認められるようになる。この終末期にみられた新たな変化は、畿内独自の動きではなく、広範囲の地域で起こった共通した現象であり、背後に各地の首長同士の密接な関係がうかがえよう。このことは本稿では詳しく述べる事が出来なかったが、今後の課題としたい。

〔謝辞〕本稿は一九九〇年に大阪大学文学部に提出した卒業論文に加筆修正を行ったものである。懇切に御指導下さった都出比呂志先生および福永伸哉先生にお礼申し上げる。また、松木武彦、北條芳隆、禹在柄、佐々木憲一、朴天秀、杉井健、清家章の先輩、同学には心からのご協力を頂いた。また、京都弥生談話会・考古学研究会関西例会で発表の機会を与えていただき、有意義な助言をいただいた。さらに執筆の際、資料調査において石神幸子、岡村勝行、奥井哲秀、大谷治孝、大船孝弘、京嶋寛、小林義孝、篠宮正、下村晴文、菅原章太、高井健司、田上雅則、田中清美、禰宜田佳男、服部聡志、平田洋司、広瀬雅信、藤田三郎、藤田幸夫、北條ゆうこ、宮崎泰史、村上富喜子、森田克行、柳本照男、山崎秀二、米田敏幸の諸賢には大変お世話になった。心より感謝の意を表したい。

注

- (1) 七田忠志「神の憑代としての土器」『考古学』第七卷第七号、一九三六年
- (2) 勝部明生「穿孔土器の考察——船橋遺跡出土例を中心として——」『横田健一先生還暦記念 日本史論叢』(横田健一先生還暦記念会) 一九七六年
- (3) 田代克己「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『鳥越憲三郎先生古希記念論集・村構造と他界観』(雄山閣) 一九八六年
- (4) 辻本宗久「弥生時代の墳墓祭祀について」『花園史学』八(花園史学会) 一九八七年

- (5) 田中清美「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集2』（考古学を学ぶ会）一九八八年
- (6) 辻本宗久は、復元不可能な破片の状態で大量の土器が周溝内から出土する資料を重視し、儀礼に使用したものを廃棄したとした。しかし、辻本の提示した例のほとんどが溝が埋まりきった後に堆積したものであり、墳墓に直接伴うものか混入品であるのかの判別が困難である。本稿では辻本の提示した資料は分析の対象から除外する。注4前掲
- (7) 阿部幸一他『瓜生堂遺跡Ⅲ』（瓜生堂遺跡調査会）一九八二年
- (8) 器種の細分と呼称は、次の文献を参考にしている。佐原眞「畿内地方」『弥生式土器集成』本編二（東京堂）一九六八年。ただし、佐原が壺形土器Aとしたもののなかで長い頸部に大きく開く口縁部をもつものを広口長頸壺、口縁部が受口状をなすものを壺形土壺Fとともに受口状口縁壺とし、それぞれわけた。
- (9) 分析対象とした遺跡は次の通りである。瓜生堂、城山、亀井、久宝寺、瓜破、森小路、山ノ内、鬼虎川、西ノ辻、長原、巨摩廃寺、雁屋、加美の各遺跡。
- (10) 広瀬和雄他『亀井（その2）——近畿自動車道天理く吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——』（財）大阪文化財センター）一九八六年
- (11) 注7前掲
- (12) 煤の定義は、炭素の粒子が燃料の不完全燃焼によって器壁に付着するものとし、炎が直接当たる部分には煤が付着せず赤色化し、その上部に煤が付着する。
- 西川卓志「弥生時代煮沸形態とその変遷」『関西大学考古学研究室参拾周年記念 考古学論叢』（関西大学）一九八八年
- (13) 玉井功他『巨摩・瓜生堂——近畿自動車道天理く吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——』（財）大阪文化財センター）一九八二年
- (14) 上野利明他『鬼虎川遺跡12次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会、東大阪市教育委員会）一九八七年
- (15) 杉本二郎他『城山（その1）——近畿自動車道天理く吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——』（財）大阪文化財センター）一九八六年

- (16) 田代克己他『恩智遺跡Ⅰ』（瓜生堂遺跡調査会）一九八一年
- (17) 田中清美『加美遺跡の検討』『古代を考える四三』（古代を考える会）一九八六年
- (18) 和田清・石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宗書倭国伝・隋書倭国伝』（岩波文庫）一九五一年
- (19) 辻本武『雁屋遺跡発掘調査概要』（大阪府教育委員会）一九八七年
- (20) 米田敏幸他『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書』（八尾市教育委員会）一九八八年
- (21) 赤木克視他『久宝寺南（その1）』——近畿自動車道天理く吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——
 （財）大阪文化財センター）一九八七年
- (22) 対象となる遺跡は注9で挙げた以外に以下の通りである。山賀、川北、喜連東、八尾南、久宝寺南、東郷、亀井北の各遺跡。
- (23) 金光正裕他『久宝寺北（その1く3）』——近畿自動車道天理く吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——
 （財）大阪文化財センター）一九八七年、および注7・16前掲
- (24) 中期後葉、終末期の加美遺跡の資料は未発表であるが、実見した範囲内で統計に加えた。なお資料の使用を快諾してくださった田中清美、藤田幸夫の両氏に感謝します。
- (25) 桑原久男は弥生後期の土器の無文化を櫛描文型器種から非櫛描文型器種への転換ととらえ、それらと結びついた習俗や儀礼の変化を指摘しているが、壺の役割を考える際に参考となろう。
- (26) 桑原久男「畿内弥生土器の推移と画期」『史林』72—1、一九八九年
- (27) 森田克行他『安満遺跡発掘調査報告書——9地区の調査——』（高槻市教育委員会）一九七七年
- (28) 広瀬雅信他『東奈良遺跡発掘調査概要Ⅱ』（大阪府教育委員会）一九九〇年
- (29) 山崎秀二他『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（守山市教育委員会）一九八五年
- (30) 加藤安信他『朝日遺跡』（愛知県教育委員会）一九八二年
- (31) 赤塚次郎他『土田遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター）一九八七年
- (32) 坂上克弘他『歳勝土遺跡 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書V』（横浜市埋蔵文化財調査委員会）一九七五年

- (31) 山本一博他『能登川町埋蔵文化財調査報告書第八集 柿堂遺跡』(能登川町教育委員会) 一九八七年
- (32) 伊藤敏行「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集』Ⅳ(財)東京都埋蔵文化財センター) 一九八八年
- (33) 近藤義行他『芝ヶ原古墳』城陽市埋蔵文化財調査報告書第一六集(城陽市教育委員会) 一九八七年
- (34) 伊藤勇輔他『奈良県宇陀郡大王山遺跡』(奈良県立橿原考古学研究所、榛原町教育委員会) 一九七七年
- (35) 森下衛他『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』(園部町教育委員会) 一九九一年
- (36) なお、高槻市古曽部遺跡では後期初頭の木棺墓から鉄器の副葬、および墓壙上に壺と高坏と器台とを伴った資料が発見されている。後期初頭のこのような在り方は本文で挙げた終末期の資料とは別の意味で評価すべきであると考え
- (37) 千葉県市原市神門四号墳でも同様な状況が認められ、首長間のネットワークが関東地方にまで及んでいることは重要である。田中新史「市原市神門四号墳の出現とその背景」『古代』六三、一九七七年

(大学院前期課程学生)